

大暴風雨の被害 土陽新聞（明治二四・八・二五）の記事に「去る十六日の暴風雨被害の状況、田野分署より警察部へ達した報告は左の如くなり」と。

「安田村。倒家二十三棟・納屋三十六・雪隠三十四・神社一・その他に半倒家屋十六・納屋雪隠合三十二。破損家屋六十四・雪隠三十・学校四棟・納屋二十四・社寺及び公署五棟・山岳崩壊により圧死女一人・同負傷男一人・女二十人・崩壊による埋没田地一ヶ所・作物被害稻三分減」とある。

「中山村。倒壊家屋一・納屋二・半倒家屋二・破損家屋七・道路破壊三ヶ所・作物損害稻二分・雑穀四分減」とあり、救助法もない当時、その復旧は困難であったと思われる。

土陽新聞（明治三二・八・二六）の記事に「低気圧の中心は九州の南端をかすめて北東に進行し、午后四国に進み、翌朝六時日本海に達し、その速度六十哩で普通の二倍になり、安芸町常設通信員よりの報道（二十九日発）によれば、安田村に暴風雨被害、死者一人・家屋倒壊二・大破九・浸水五三・その他建物全倒三七・半壊五・大破一〇・堤防欠壊一六二間・道路破壊二八間・農作物の被害少し。

中山村に死者二人・負傷一人・家屋全壊五・大破一〇・堤防欠壊一八〇間・道路二五〇間・橋流失四ヶ所」と報ぜられている。

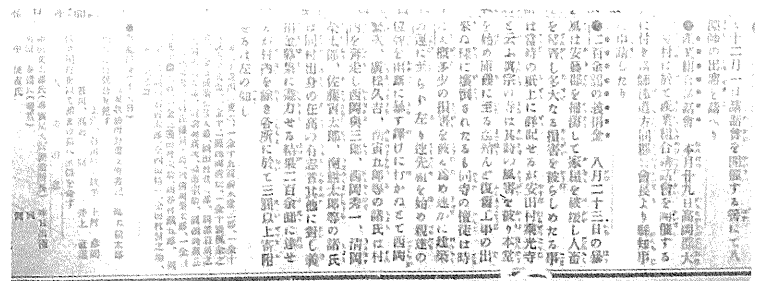
九月二十二日、片岡侍従が暴風雨被害視察に到着している。

この頃から、村の政治も村人たちの生活もようやく平和的に行なわれるようになった。

## 二 大正時代

**台風の被害** 明治四十五年（一九一二）七月三十日、明治天皇が崩御し、年号が大正と改元された。大正元年（一九一二）八月二十三日、土佐沖を北上して来た七三〇ミリバールの台風が、夜に至り、香美郡夜須附近に上陸した。安芸郡は激しい暴風雨、高潮となり、被害が甚大で、安芸郡役所の集計では、死者三三人・家屋全潰一八五四戸・半潰一二四〇戸・大破二一〇〇戸・浸水一五町歩・漁船の流失八二隻であった。

続いて同年九月二十二日、夜半に県東部海岸を掠めて北上した七〇〇ミリバールの大型台風で、二十一日・二十二日の合計雨量は五〇〇ミリ内外となり、風水害の被害が大きく、また、その経路が室戸台風に似ていて、高潮による被



大正元年11月17日の土陽新聞

害も安芸郡全域的に大きかった。郷土も、二度重った台風襲来により、土陽新聞（大正元年十一月十七日）には「……詳記せるが安田村乗光寺と云ふ真宗の寺は、其時の風害を被り、本堂を始め庫裡に至る迄殆んど復興工事の出来ぬよう壊倒されたるも同寺の檀徒は時に大抵多数の損害を被るため速やかに建築の運びに至らず、左り逆先祖を始め親達の位牌を雨露に暴す訳に行かぬ……」

とあり、安田村は全体的に大きな被害を受けた。古老の話によると、「松の大木が根こそぎ倒れ、台風時には無数の火が飛んで昼のようであった。」と、伝えられ、大正時化と呼ばれている。

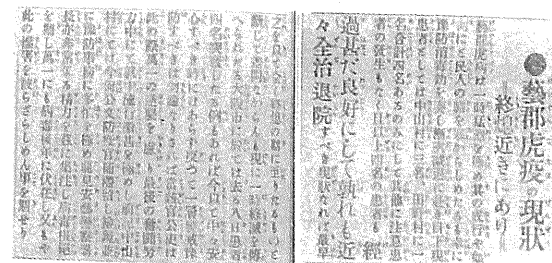
また、安田川は西島の堤防が決壊して氾濫した。土陽新聞（大正元年十一月十九日）によれば、

「災害復興費補助―本年八、九月に起りし暴風雨に因する県下東西町村の堤防災害復興工事費申請額は、当時しばしば報導せし如く頗る多額に上り、総額十九万五百七十四円七十三銭九厘に達せり、之に対し県に於ては精密なる査定修正を加え現在尚調査中なるが昨日迄に県費補助額の決定せしもの左の如し。

安田村西島水害予防組合 四千八百四十七円。」

とあることからしても、郷土が両台風により受けた被害の程度が理解される。

**伝染病発生** 台風被害の後には疫病の発生率が高くなるものであるが、中山村に至るまでコレラが大発生して、その惨禍にみまわれた。土陽新聞（大正元年十一月十五日）には次の通り出ている。



大正元年11月15日の土陽新聞

## 五 災害・消防

## (1) 災 害

安田町を襲った災害は古来より数多くあったが、今から十年以前からのものに焦点をしばって記述し、今後の教訓としたい。

昭和三十九年台風二十号 昭和三十九年（一九六四）九月二十四日夜半より二十五日未明にかけて襲来した台風二十号は、九四〇メートル、瞬間最大風速三五メートルであった。安田町では住家全壊三戸、半壊十五戸、冠水田十町歩、農作物の被害七一、二二〇千円、林産物被害一〇、〇〇〇千円、土木農林水産関係公共施設被害八、七八〇千円大被害を与えた。

強 風 昭和四十年（一九六五）五月二日の晩から、三日の昼過ぎにかけて、県下を襲った雨まじりの強風は、室戸岬で最大風速四十八メートルを記録した。安芸郡の海岸沿いの民家は、瓦や看板が飛ぶなど、さながら台風来を思わしたが、園芸作物の被害は最も大きく、安芸郡の被害総額は、実に二億七千万円という膨大なもので、強

風の中心となった中芸地区がそのほとんどを占めており、中でも安田町の被害はキュウリ十八ヘクタール、茄子二十一ヘクタールが全滅して、被害額も一億三千万円と言われ、この数字は郡下被害総額の五割を占めるもので、その大半は唐浜地区から出ており、地区農家の打撃は深刻なものがあつた。

被害地区を巡回すると、ハウスの屋根が飛んで木竹が壊れちがいのようになったものや、支柱が折れ曲つたものが重つて、見るも無慙な状況で、特に西部の西北、明神地区の茄子は、葉が折れて幹だけ残つて突っ立っているものなどがあつて、全滅の状態である。地区の人は、「園芸づくりをはじめてこんな目にあつたのは始めてだ。春一番が今年は遅れて来たのだが、こんなに長い時間しかも集中的に強風が来たことはなく、茄子は肥料が効いて、これから「なろう」という直前だけに痛手は大きかった。中には茄子一本にしぼっていた人もあつて途方にくれていた。ピーマンは投資も大きく、ハウスも大がかりなもので、一番気づかわれたが、結果はハウスの痛みも少なく不幸中の幸いと言えよう。キュウリはもう覆いをはいでよい時期にあるが、茄子はまだその時期でなく、手立てを直して整理をしても此の状態では回復はむづかしく、だからと言って次の稲作へ肥料が残りすぎるので、泣き面に蜂というところですよ。」とこもごも話され、思案にくれていた。

昭和四十五年台風十号 猛台風十号は、昭和四十五年（一九七〇）八月二十一日早朝、高知県の中心部に上陸、高知市の中心に大きなつめあとを残した。「天災は忘れた頃にやってくる。」と言われたのは昔のこと、いまはラジオ・テレビなどで台風の襲来は充分予測できる。しかし、どうにもならないこの自然の猛威に対して、ただ呆然とするのみだった。

園芸農家にとっては、これから本格的な床づくりに入る矢先のことでもあり、この災害には深刻な表情を見せていた。

安田町の被害状況は、公立文教施設三六〇千円、農林水産施設一〇三、四〇〇千円、その他の公共施設三七〇千円、農業被害五六、七三〇千円、林産被害一、二七〇千円、水産被害七〇千円、商工被害四、九七〇千円、その他一五、五七〇千円で合計は二億円を越えた。

**集中豪雨** 昭和四十六年（一九七〇）七月二十五日から二十六日にかけて襲った集中豪雨は、安田町を中心に中芸地区に大きな被害を与えた。集中的に受けた本町では、とくに正弘・間下・東谷地区の被害が大きく、正弘地区では三戸の民家が土砂に押しつぶされ、下敷となった一家六人のうち二人が死亡するという不幸な人身災害も発生した。また北川村でも、救助中の若い消防士（大野）と警察官が濁流に吞まれて殉職するという事故があった。

空が破れたのでは―それほどの激しい雨。中芸地区の住民にとっては長い不安の夜だった。被害の多かった安田町中山地区では、夜がしらむにつれ多少小降りになった。しかし、いたる所で激流が無気味な音をたてて渦を巻く。地区の長老も「こんな雨は生まれて初めてだ」と顔をひきつらす。

安田川に沿って延びる県道もいたる所で赤色の土砂に埋まり、その上を赤土色の濁流が流れていた。大きな石がゴロンゴロンところげて田んぼのあちこちに。表面に出ている部分だけでも子牛ほどのはざら。祖先から受け継ぎ、細々と作ってきた段々畑も土砂や流木で埋まってしまった。「稲を作ってはいかん。園芸物は安値。その上に今度の天災。いったいどうしたらいいのか」。荒れはてた田んぼに呆然とたたずむ老人の顔は泥だらけだった。

被害の調査が進むにつれ、多くの人は、昨年（昭和四十五年）の台風十号で「土地が狂った」とも言っていた。裏山を見ながら「少しの雨ですぐ大水だ。山の形が昔とはすっかり変わった。もう少し山の木を大切に残してお



集中豪雨による間下部落の惨状



東谷川の氾濫